

遠い街



イラスト・岡林玲生

電車という言葉には庶民的なイメージがある。列車より小型で、なぜか日常生活に密着していて、買い物籠を提げた主婦や、通学途中に雑誌を読んでいる学生や、ときには目的地のない、暇なご老人などが乗っているような、そんなイメージ。

一方、列車という言葉からは、かつて機関車からもくもくと煙を吐きながら車両を牽引していた、重厚で力強い姿が浮かんでくるので、列車というものに乗ったなら、どこかに遠出をしなくてはならない気になる。

電車は小さくて軽くて、列車は大きくて力強い。言葉のイメージ喚起力は面白い。黒い煙を吐きながらガッシガッシと線路の上を走る蒸気機関車を知らなければ、また別なのかも知れないけれど。

もっと言えば、車両の窓から過ぎて行く家々や畑や樹木が間近に手に取るように感じられるのが電車であり、遠くの山並みや、海や広い丘陵が見渡せるのは列車、そんなイメージの違いもある。

何十年も昔だが「遠くへ行きたい」というジェリー藤尾の歌があった。覚えておられるのは、中年以上かも知れないけれど。

……知らない街を、歩いてみたい……どこか遠くに行きたい……

この歌を聴いた若い人が、知らない街というの、ヨーロッパですかね、それともアジアでしょうか、と言ったのでびっくりした。私のイメージでは隣の県とか、地方に住む人にとっての大都会とか、また都市生活者が半日かけて辿り着ける海辺の街に行くとか、その程度の遠

さだった。

そしてこのときの乗り物は、電車では日々の日常から抜け出せないもので、列車でなくてはならないと思ひこんでいた。

……愛する人と巡り会いたい……

歌詞はそう続くのだから、それはやはり日本国内でしょう、とは思ったもの、日本国内に「遠い街」など失くなったのかも知れず、飛行機に乗らなくては「遠い街」まで行けないのだとすると、かなり気持ちの測量目盛りが違ってくる。愛する人との出会いも、アメリカやパリやホーチミン市を夢見ることも可能というわけか。

私もこの五年をかけて、九州大学のプロジェクトでアジアを十カ国回ってきまして、アジアの街が随分身近にはなってきたけれど、ふと気付くと、電車で行ける範囲

の近場のことを何も知らないことに思い至った。先日も地元の電車に乗る用事があり、通勤時間を外れた昼間にぼんやりと窓の外を見ていると、稲田が黄色く色づいているその間に、曼珠沙華の赤が鮮やかに点々と置かれている様子に、はっとなった。

私にとっての「遠い街」とは、列車で行くまでもなく、ましてや飛行機に乗る必要もなく、数十分あれば辿り着けるところにあるのかも知れず、がたごとと揺れる、電車で充分。

下りた駅前で時間があつたので、駅前の喫茶店に入り珈琲を頼んだ。愛する人はいないものかと探したが、前掛け姿のゴマ塩頭のマスターが一人。珈琲をすすりながらニヤニヤする私を、不思議な目で見ていた。

文・高樹のぶ子
Nobuko TAKAGI

山口県防府市生まれ。1980年『その細き道』を発表、創作活動を始める。1984年『光抱く友よ』で芥川賞、1999年『透光の樹』で谷崎潤一郎賞を受賞。2005年より九州大学アジア総合政策センター特任教授を務める。著書多数。近著に『甘苦上海』『飛水』（12月15日発売）など。